

INDEX

— TOPICS —

1. ケニア「ビクトリア湖における包括的な生態系及び水環境研究開発プロジェクト」 キックオフミーティング
熱帯医学研究所 附属アジア・アフリカ感染症研究施設 俵ともか
2. ベトナム「長崎大学・カントー大学交流推進室開所式」
国際連携研究戦略本部 中尾 隆宏 ベトナム拠点 主任
3. カザフスタン共和国 5人の医師達の短期研修
国際連携研究戦略本部 助教 高橋 純平
4. モザンビークの保健人材養成を担う13名の研修員が長崎の経験を学ぶ
国際連携研究戦略本部 教授 加藤誠治
5. 感染症対策 ～感染症対策を担う各国の行政官14人が長崎の経験、知見を学ぶ～
国際連携研究戦略本部 教授 加藤誠治

1. ケニア「ビクトリア湖における包括的な生態系及び水環境研究開発プロジェクト」 キックオフミーティング 熱帯医学研究所 附属アジア・アフリカ感染症研究施設 俵ともか



記念撮影

2014年2月3日、水産学部と工学部およびケニアのマセノ大学による共同事業「ビクトリア湖における包括的な生態系及び水環境研究開発プロジェクト」の開始に併せて

キックオフミーティングが開催されました。ケニア環境省、首相府、在ケニア日本大使館、JICA ケニア事務所などの代表者、5県の知事、マセノ大学関係者らが出席し、本学からは学長をはじめ、両学部の教員、アフリカ拠点関係者など約150名の出席者がマセノ大シティキャンパスのあるキスムに集まり、プロジェクトの開始を祝いました。会議ではプロジェクトの概要を紹介したほか、活動に参加するBeach Management Unit（日本でいう漁協）を訪問し、市場の現状を視察しました。会議の合間の昼食では、ビクトリア湖でとれた魚料理が並び、ケニア風に調理された魚はどれもおいしく、湖の恵みを実感しました。多くの出席者たちにとって、ビクトリア湖の現状課題を見つめ、湖がもたらす恩恵とその未来をあらためて考える日となったのではないのでしょうか。飲料水をはじめ、水産物、漁業など住民にとって、生きていくうえでなくてはならない湖です。安全な水を飲みたい、おいしい魚をたくさんの人に食べてもらいたい、という希望がビクトリア湖の水質改善と資源回復へのエネルギーにつながっていくのだと思います。こ



市場では女性たちが魚を調理して販売する（寺田駐ケニア大使）

のプロジェクトは2年間の予定で、活動の拠点としてマセノ大キャンパス内にオフィスと実験室を設置し、長崎大学側から4名のスタッフが常駐しケニア側参加機関と協力しながら進めていきます。途上国が、発展にともない直面する環境問題に、学部を超えて取り組む画期的なものとなる今回のプロジェクト。拠点の一員として、精いっぱい支援する思いです。



整備中の実験室



市場にはテーブルと計りがあるだけ。冷蔵庫など保存機能はない。



学長のスピーチ



ホテイアオイの様子を見る学長と寺田大使



概要を説明する水産学部の松下教授



2. ベトナム「長崎大学・カントー大学交流推進室開所式」

国際連携研究戦略本部・ベトナム拠点 主任 中尾 隆宏



長崎大学・カントー大学交流推進室開所式

2014年2月28日（金）、カントー大学（ベトナム国カントー市）に於いて長崎大学・カントー大学交流推進室開所式が執り行われました。長崎大学側から片峰茂学長、水産・環境科学総合研究科の征矢野清教授、阪倉良孝教授、宮西隆幸教授、石松惇教授、カントー大学側から Ha Thanh Toan カントー大学長、Nguyen Thanh Phuong 副学長、Tran Thi Thanh Hien 副学長ら多数が出席しました。

歓迎の挨拶でカントー大学長から今後の両大学間の発展への期待が述べられた後、片峰学長から、カントー大学の研究、人材育成において長崎大学が必要な役割を果たすことを希望していると述べました。

交流推進室開所式の終了後、カントー大学養殖・水産学部及び環境天然資源学部を訪問し両学部との今後の研究交流について意見を交換し、施設を見学しました。環境天然資源学部では、Nguyen Hieu Tung 学部長がカントー市周辺のメコンデルタ地域の水環境問題研究を紹介しました。

長崎大学とカントー大学は2012年に大学間学術交流協定を締結し、水産学部教員が共同研究を行ってきました。現在、カントー大学は、平成26年度からJICAが実施するカントー大学強化事業（農学、水産、環境分野）に向けJICAと協議中であり、平成26年3月下旬からは事業準備調査が約4か月間行われます。長崎大学では、水産・環境科学総合研究科が中心となり、交流推進室をベトナムでの拠点とした研究交流を計画しています。

現在、水産・環境科学総合研究科は「南ベトナム・メコン川流域における水産・環境科学教育研究拠点の創成」（平成25年度大学高度化推進経費）を実施しており、交流推進室は、海洋フィールド科学者育成、連携教育の場として利用される予定です。

カントー大学は4つのキャンパスを持ち、今



カントー大学養殖・水産学部

2014年2月28日（金）、カントー大学（ベトナム国カントー市）に於いて長崎大学・カントー大学交流推進室開所式が執り行われました。

回訪問した養殖・水産学部及び環境天然資源学部水産、環境学部はカントー市中心部にある第2キャンパスに位置します。最寄り空港のカントー空港から第2キャンパスまではタクシーで20分、料金は約20万ドン（約1,000円）です。ベトナム北部のハノイ空港とカントー空港間はベトナム航空の直行線が毎日1日1便から2便運航しています。ホーチミン空港経由の場合、空港で運転手付車両をレンタルし3時間（約170km）の移動が必要です。ベトナムの高速道路網は未発達のためスクーターも走行する一般道を走ることが多いです。

デルタ地域の中央部に位置するカントー市は、長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点がある首都ハノイと比べると、人口は約5分の1（120万人）、冬場も温暖で、



早朝の水上マーケット

11月から3月まで曇天で晴れ間がほとんどないハノイより過ごしやすく感じられました。また、海から離れたハノイで魚料理と言えば川魚（鯉、ナマズ）ですが、カントーでは近海で取れた新鮮な魚介類が手に入るため、生きた蛸を鍋に入れる料理もあります。メコンデルタ地域には大小多数の川が流れており、川は農産物の物流経路でもあります。カントー市の南側を流れるカントー川でも、早朝、水上マーケットが開かれ、野菜、果物を積んだ多くの船が往来し、船上で荷物の受け渡しを行う人達を見ることができます。

国際連携研究戦略本部では、熱帯病・感染症研究分野、放射線医療科学分野だけでなく、海洋環境生物資源研究分野の国際研究プロジェクトも推進していますので、引き続き

交流推進室の整備を行っていく予定です。



中尾隆宏事務職員（左から3人目）



2013年12月14日～20日まで、中央アジアのカザフスタン共和国から市立病院副院長らを含む医師5名

の短期研修を受け入れました。以下はその報告および雑感です。

この研修は、これまでの約20年におよぶ長崎大学とカザフスタンの医療教育研究諸機関との協力関係を背景に、「カザフスタン共和国保健開発センター」という、日本風に言うところの保健省外郭団体からの依頼を受け、CICORNが組織・受け入れを担当することとなりました。カザフスタンでは、「カザフスタンの健康」と題された5年計画の保健医療改革の国家プログラムが進行中で、医療従事者のレベルアップのために海外研修への派遣が近年活発化しているといえます。研修費用はすべてカザフスタン側が負担するという、これまでの旧ソ連圏では考えられなかった研修形態です。資源マネーの財力を後ろ盾に国の近代化を図ろうとするいい意味の貪欲な姿勢が現れています。

折しも、20年継続されているNASHIM（長崎ヒバクシャ医療国際協会）主催の夏期専門医研修参加のために2011年来崎し、長崎の医療機関を多く視察していた元カザフスタン国立医科大学国際関係課長のエルビラ女史が、この研修のカザフスタン側のコーディネーターとなりました。すでに長崎での研修を経験したエルビラ女史によって提案されたPrimary Healthcare Management in Japanをテーマとする研修プログラムのベースプランが出発点となり、プログラムの企画が始まりました。長崎大学病院を基点に、県庁保健福祉課、長崎県医師会、国立病院機構長崎病院、長崎県健康事業団、南長崎クリニックに、講義および視察の受け入れをお願いしました。

先方提案の優れたベースプランのおかげで、実質4日間の極めて短期間ながらも、詰め込みすぎずに日本の一次医療のシステムについて全般的に網羅できた研修日程（下記参照）を組むことができました。

と、概要を短くまとめさせていただき、ここからは、5名

の来日した医師たちに全日程同行し通訳をした者として、あえて研修以外のいくつかのエピソードなどをご紹介します。

- ・まず来崎した5名の男女比率ですが、♂1：♀4で圧倒的に女性優位。ソ連時代から今日まで、旧ソ連諸国ではいまでも医学部は「女の園」です。男女比率は、3：7から2：8です。院長、副院長クラスは、男性が多い印象を受けていますが、女性院長もけっして珍しくありません。今回の参加者のうち3名が副院長、うち1名が男性、2名が女性でした。

- ・福岡空港国際線到着ロビーにはなんと銀行の両替窓口がなく、レンタル携帯の窓口が両替を行っています。が、その上限は一人500ドル。旧ソ連圏では、医師も一労働者に過ぎず、決して高給取りではなく、未だに医師の平均給与は国の平均に比べて高くはありません。人によっては500ドルも替える必要のない人も多いと思いきや、みなさんが一様に不満顔。長崎到着後、研修の合間にお連れした銀行ではみなさんがかなりの大金を両替し、研修終了後のフリータイムは、夢彩都やココウォークへ繰り出していたようです。

- ・とはいえ、あまり食事にはお金をかけない主義のご様子で、夕食はみなさんスーパーで惣菜を買い、和気藹々と部屋食をされていたようです。カザフスタンは主にイスラム教の国。ポークは御法度ですので、長崎名物ちゃんぽんや皿うどんはあいにくご賞味いただけません。和食も、「カザフスタンにも寿司レストランがいたるところにあるわよ」と言うものの、いわゆる和風だし系の料理への「食いつき」はもう一声。食べやすいほうがよからう、とお連れした浜口町の某イタリアンのお店も、予算の関係でメインの肉料理を頼めず、パスタとサラダのみのランチセットでは、どうも物足りなかった様子。

- ・稲佐山温泉「ふくの湯」にもお連れしました。サウナをこよなく愛する旧ソ連圏の方々には、日本の温泉は大好評…のはず



県医師会研修風景

が、唯一の男性参加者によれば、「カザフスタンの最新のサウナ・スパーに比べたら、悪いがたいしたことない」。むむむ。旧ソ連圏の方から日本の大浴場を貶す発言を聞いたのは、正直初めてでした。おそるべしカザフスタン・サウナ！？

・同じ唯一の男性ドクターは、レントゲン検診車を見学中、技師さんに「一枚撮ってくれる？」と気軽にリクエ

スト。それはいくらなんでも、と思いつつ通訳すると、「あ、いいですよ～」と意外な答え。「でも、私は画像を読めませんが？」「いや、自分で読影するから。」撮影してほんの数秒後に映し出されるレントゲン画像を一瞥すると、ご専門は泌尿器のヘビースモーカーのこのドクター、「まだ生きれそうだな。」この研修の一番の収穫だったかもしれません（笑）。

月日	時間	内容	受入機関
12/16 月	10:00-12:00	「保健行政と保険制度」	県福祉保健部福祉保健課
	14:00-17:00	大学病院視察：「大学病院の機構・予算について」「外来と薬局」「品質管理・病院マネジメント」	長崎大学病院
12/17 火	10:00-12:00	「病院の検査・分析ラボ」	大学病院検査部
	13:30-15:00	「医療における IT の活用」	大学病院医療情報部
	16:00-17:30	「医師会の歴史・目的・課題」	長崎県医師会
12/18 水	9:30-11:30	「国立病院機構とは」 「重症心身障がい児病棟について」	国立病院機構 長崎病院
	13:30-15:30	「日本における母子保健のプライマリ・ヘルスケア」	大学病院産婦人科
12/19 木	10:00-12:00	「住民検診のしくみと運営」 がん検診バスの視察	長崎県健康事業団
	14:00-16:00	「介護保険と介護事業について」	南長崎クリニック

4. モザンビークの保健人材養成を担う 13名の研修員が長崎の経験を学ぶ

国際連携研究戦略本部 教授 加藤誠治

1. 本年1月、安倍総理が日本の総理大臣として初めて訪問し、注目を浴びたモザンビーク。安倍首相の滞在中には、保健分野の協力として無償資金協力「マプト市医療従事者養成学校建設計画」に関する書簡の交換が行われました。
2. また昨年2013年6月に開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD V）において日本は、アフリカに対し「保健分野における500億円の支援及び保健医療者12万人の育成」を表明しています。

国際連携研究戦略本部では、国際貢献・国際協力に資するプロジェクト参画として、平成24年度から、JICA九州からJICAモザンビーク国別研修「保健人材育成機関教員能力強化プロジェクト」を受託しています。本研修は、長崎大学の各部局、長崎県、県央保健所、長崎市医師会看護専門学校、九州医学技術専門学校、平戸市民病院、長崎県環境保健研究センターなど多くの機関にご協力いただき実施しています。

研修の目的は、モザンビーク各州の保健人材養成機関において、適切な保健サービスを提供できる水準の保健医療人材が持続的に養成される体制を整備するために、各州の保健局長や医療従事者養成学校の校長等に対して、長崎において人材養成等に関する研修を実施し、モザンビーク帰国後に医療従事者養成学校の運営等をより効率的・効果的に行うための知識を習得させることを目的として実施されます。

今年は平成26年1月22日～30日の約2週間、モザンビーク保健システムに関する研修員のプレゼンテーションに始まり、講義や教育施設の実地見学などを行い、最終日に研修総括報告の発表が行われました。





< 来長した研修員の声 >

- 今回の研修は良いプログラムであった。内容も良かった。国に戻ったら自分の仕事の計画を見直したい。
- 大西先生には大変感謝している。分かり易い講義に加え昼食も一緒にさせていただいて日本での食習慣等が分かってとても良かった。大西先生と日本食と一緒に食事出来たことは嬉しかった。
- 訪問先の活動を観察して気付いたことは、その組織の参加者全員が集まり目的を共有していたと思う。いかに全員が仕事の目的を共有するかという方法に興味を湧いた。
- 日本では医療従事者の国家試験があり、モザンビークでも制度の導入を考えたい。
- 看護学校では学費を生徒が支払う点が印象的だった。モザンビークでは全て国費で対応しているので。

- 医療従事者学校では卒業生は自分で就職先を選択していることが良いと感じた。モザンビークでは国が斡旋し、選択の余地はないので。
- 義務教育制度に感動した。又、モザンビークでも健康保険制度を考えたい。
- 平戸の訪問は良かった。食生活改善推進委員の皆さんと話が出来たこと、レセプション、住民の人たちと交流できたこと。
- 特に平戸高校訪問は良かった。高校でも高齢者ケアの演習室があり、高齢化社会に対応した教育を専門学校ではなく普通高校レベルで行っていることが印象的であった。
- 今回の視察現場は primary care 中心だったが、予防医療の現場での活動が加えられれば良い。

- 原爆資料館見学出来て良かった。
 - 期待以上の研修であったと総括している。今後この研修が継続されることを期待する。
- 多くのモザンビーク人が来長して欲しい。



5. 感染症対策 ～感染症対策を担う各国の行政官14人が長崎の経験、知見を学ぶ～

国際連携研究戦略本部 教授 加藤誠治

日本は戦後の1954年から、日本人専門家の海外派遣、外国人の研修員受入事業を通じ、政府開発援助（ODA）を開始しました。そうした歴史から、海外からの研修員受け入れ事業はODAの中でも伝統ある事業と言えます。

この度、国際連携研究戦略本部はJICAからの委託の元、アジア、アフリカ、中米諸国の感染症対策を担う行政官らを対象とした「感染症対策行政」研修を実施しました。

「三大感染症」といわれるHIV/エイズ、結核、マラリアに加えて、その他の熱帯病などは開発途上国の人々の健康に対する脅威であり、また新型インフルエンザ等は地球規模の新



たなる課題となっており、感染症対策は日本をはじめ国際社会が取り組みを進めている重要課題です。そのような感染症対策に関連する本研修は、1987年より開始され、これまで東京を中心に実施されてきましたが、今年度からは東京に加えて、長崎の感染症対策の経験や県保健行政の実施体制、そして長崎大学が有する熱帯医学研究所等における最先端の知見を学ぶべく、研修プログラムを一新して実施することになりました。今年度は、エチオピア、ケニア、タジキスタン、中国、パキスタン、パナマ、マリ から合計14名が参加して、長崎では2月24日（月）から3月3日（月）まで研修が行われました。受託に際しては、厚労省、JICAと協議を重ね従来の研修コースをベースにしつつも、地方行政の現場における感染症対策の実際及び熱帯医学研究所が蓄積してきた知見を加え研修コースを設計した。その結果、各研修員が

目標を達成する上での研修デザインに関して、14人中13人が「非常に良い」、「良い」との評価となりました。今回の研修員の関心事項としては、アフリカの研修員からはマラリア、結核に関して参考になる具体策に関してのニーズが高く（現実問題として効果的な対策はなかなか難しいことですが）、又デング熱、フィラリア等のNTDもまだまだ関心、ニーズが高かったと言えます。今回はじめて本学が本コースを実施いたしました。訪問先機関13ヶ所、全講師30名という非常に広範な機関と

多くの方々のご理解とご協力によって支えられています。今回ご協力いただいた関係機関、厚生労働省大臣官房国際協力室、結核感染症課、食品安全部、厚生科学課、国立感染症研究所、国立保健医療科学院、UNICEF 東京事務所、国立国際医療センター、結核予防会、JICA 本部、長崎県福祉保健部、県央保健所、県環境保健研究センター、長崎大学附属病院感染制御教育センター、熱帯医学研究所、SABIN 研究所（ワシントン）の関係者の方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。



発行人：国際連携研究戦略本部長
編集：加藤 誠治 国際連携研究戦略本部コーディネーター
〒852-8523 長崎市坂本町1丁目12-4
TEL: 095-819-7008 Fax: 095-819-7892
e-mail: cicorn@tm.nagasaki-u.ac.jp